

1. はじめに

青森県といえば、恐山(むつ市)や川倉地蔵尊(五所川原市)の他、イエス・キリストの墓(新郷村)や源義経北上説(義経=チンギスハン説)など、民間信仰(伝承)やスピリチュアルスポットなどが多く残る地域である。これらはどのようにして誕生し、受け継がれ(或いは形を変え)、そして今日に至るのだろうか。今回のスタディツアーでは恐山と川倉地蔵尊、そして松緑神道大和山(東津軽郡)を訪れ、人々の信仰の在り方について学んだ。

2. スタディツアーの行程

本スタディツアーは2019/07/20(土)~21(日)の2日間に渡り開催された。20(土)は川倉地蔵尊を、21(日)は恐山と松緑神道大和山本部とを見学した。また両日も移動中のバス内で講義や質疑応答を行った。

3. 内容

3-1. スピリチュアルケアについて

バスの中で行われた講義では宗教とスピリチュアルについて学んだ。スタディツアーでは宗教などが専門の先生方が多数いらしたため様々な話を聞くことが出来た。”宗教の定義は非常に難しく、スピリチュアルの定義も曖昧“という話を聞いたが、確かに普段宗教と言われて私が想像するそれは、私が知っている(つもりの)特定の宗教・宗派(例えば仏教であったりキリスト教であったり)についてまとめた何かで定義ではない。また“スピリチュアル“という語自体はキリスト教に由来するが、21世紀においてはニューエイジや心霊主義の影響を受け、既存宗教の外にあるもの(枠組みに当てはまらないもの)、反宗教(特に反キリスト教的なもの)などの様々な意味合いを含んでいる。このツアーでも宗教施設やスピリチュアルスポットを訪れ、宗教とスピリチュアルの違いを学ぼうと思っていたが、中々納得のいく理解までは至らなかった。

他にはスピリチュアルケアの概要と実践について先生と看護師の方から話を伺う機会があった。まず苦痛とは(1)身体的苦痛(一般的な痛み)、(2)精神的苦痛(不安や鬱)、(3)社会的苦痛(仕事や金銭、家庭面での問題)、(4)スピリチュアルペイン(霊的な苦痛、“なぜ生きているのか”“死とは何か”など人間が抱く根源的な不安)の4種に分類され、スピリチュアルケアはこのスピリチュアルペインに対応する方法である。従来の緩和ケアでは“大丈夫”などと声掛けし患者に安心感を与えるが、根本的な解決になっていないことや解決率が低いことが問題であった。スピリチュアルケアでは共に考え寄り添うことによってこれらの問題を解決できるが、時間がかかってしまうことが難点である。様々な話を聞いたが興味深かったことは日本での適用と実践についてである。日本は欧米と異なり、単一宗教国家ではなく、また戦時中の国家神道やオウム真理教事件の影響で宗教に不安や警戒を抱く人がいるため、海外の事例を適用することはできない。それならば看護師や医者など医療従事者がスピリチュアルケアを行えばよいのではと私は思ったが、日本で行う場合は牧師やシスターなどが来た方が“泊が付き”効果的だと聞き驚いた。

スピリチュアルケアと宗教的ケアはかなり似通ってはいるが、布教の可否や患者とケアする者の立ち位置に大きな違いがあった。スピリチュアルケアは患者だけでなくケアした側も自分自身を見つめなおすため、専門職や医療従事者以外の例えば親族や知り合いが行うことで大きな意義が生まれそうではあるが、デリケートな部分の問題を扱うため、実践は難しいと考えた。

3-2. 川倉地蔵尊

東北地方(津軽地方?)では亡くなった子供の霊を地蔵として供養する風習があり、川倉地蔵尊は有名な供養場である。特徴的なのは霊も成長すると考えられ、結婚(冥婚)が執り行われたり、供物もジュースから酒へと変化

したり車(の玩具)が供えられる点だ。またイタコによる口寄せもたまに行われるが、今回は見る事が出来なかった。

川倉地蔵尊は土地自体は寺院が所有しているが地域が主体となって管理・運営していた。敷地内には鳥居や仏像などが存在し、宗教宗派が入り混じっており民間信仰であることが伝わってきた。民間信仰でありまた地域主体の運営であることを最も印象的に感じたのは供物の規則が殆どなかった点である。供え物はジュースでも酒でも遺族が各々自由なものを持ってきてよい、花嫁人形が和人形でなくリカちゃん人形やキューピー人形でもよい、人形の名前も遺族が自由につけてよい、などかなり自由で、事務所にいた方も「特に規則などはなく遺族のやりたい形/供養したいもので構わない」と発言していた。一般的な寺社仏閣だと持込規則がある、事務所で購入したもののみ可、名前を付けるときは戒名代を払わなければならないなどのイメージがあったため、驚きだった。

供養するものや花嫁人形の名前にも時代や考え方の変化があつて興味深かった。供物のジュースやお菓子、人形の種類も供えられた年代によって種類と割合が大きく変化していた他、草鞋や手拭も故人が使ったことがないという理由でスニーカーやタオルを供える人が一定数いた。花嫁人形の名前も事前資料では太郎・花子などが多いと記述されていたが、ある時期の名前には「美智子」がとても多く、昭和30年代のミッチーブームの影響を受けているのではないかと個人的に推察した。

川倉地蔵尊はネット上では「恐山よりもディープな観光地」「スピリチュアルなスポット」として紹介されていることがあるが、それは他ではあまり見ない子供の霊の供養と地域主体の運営による所謂”宗教”の枠組みにとられない自由さによるものだと考えた。

3-3. 恐山とイタコ

恐山は恐山菩提寺(円通寺・曹洞宗)が管理する寺院であるが、一般的にはイタコによる口寄せが有名である。かつては寺院が管理する場(以下、管理側)とイタコなど民間信仰の場(以下、民間側)との境界は曖昧であったが、近年では管理者側(寺院)の意向によって明確に区分されており排除される傾向にあるようだ。

恐山の管理側は明確な墓石が置かれている区画が殆どなく積み石や木々に供物を置く、参拝者が供養(参拝)しながら休憩や歓談(食事や喫煙)をするという点では一般的な寺院とは大分異なっていた。見学した際も木々にタオル・手拭を吊り下げる、湖畔に食べ物を置く、名前や住所を書いた石を積み石のところに置くなどの行為が見られたが、近年では墓石を勝手に設置するなど過度の持ち込みが寺院側で問題視されたため排除傾向にあると聞いた。この辺りは川倉地蔵尊の方針と異なっており、管理者が明確な場とそうでない場の違いかと考えた。

恐山の民間側は多くの参拝者が来ているだろうと想像していたが、実際は大祭期間中だったにも関わらず人はまばらでイタコも2名しかいなかった。先生の話によれば東日本大震災の後は一時訪れる人の数も増えたそうだがイタコの数も訪れる人も年々減りつつあるようだ。原因としては人々の意識の変化もあるが盲学校などの精度整備によって盲人の就職先が多様化し、イタコになる人が減ったことが挙げられる。今回は時間の関係上実際にイタコに口寄せをしてもらうことは叶わなかったが、他の人が口寄せしてもらっているところを見学した。口寄せをしてもらうことで心の安らぎを得るということは勿論重要な要素であるが、待ち時間の中に他人と話すことによってすっきりするというのもイタコ文化の重要な要素の1つであると感じた。

3-3. 松緑神道大和山本部

松緑神道大和山は大和松風(本名：田澤清四郎)を創始者とする神道系の新宗教である。新宗教は他宗教に対して敵対的で折伏を行う印象があったが、松緑神道大和山は各宗教は元々1つで時代や地域ごとに形を変えて現れたと説明し、宗教同士で争わず来るべき時に協力するようにと教えている。松緑神道大和山は他の新宗教よりも融和的である印象を受けた。

松緑神道大和山はその名の通り神道系であるが、祝詞や所作、教え(経典)のなかに仏教や修験道の他、山岳信仰などの民間信仰の影響を受けているように思えた。

案内してくれた信者の方の話をしている限りであると、政治に積極的でない点や熱心な勧誘をしてこなかった点などで一般的な(私が想像する)新宗教よりは好感が持てたが、有機ゲルマニウムが多く含まれているという清らかな水や勧誘した信者の数が多いとステータスが上がる制度などを見ると、やはり新宗教の1つであると感じた。これについて先生は宗教組織にも人間と同じように幼年期、青年期、壮年期、老年期などの段階があり、最近できたばかりの組織は信者獲得や政界進出などに積極的だが、ある程度の信者数と歴史を持つ組織(松緑神道大和山の他には天理教など)は高齢化対策や信者減少などに対して注力すると教わった。

新宗教の本部を説明を受けながら見学したのは初めてだったが、説明を聞きながら教えの本質や他宗教との類似点を探すのはとても興味深く、面白かった。

4. まとめ

このスタディツアーでは民間信仰と宗教の関わり、スピリチュアル、新宗教などについて学んだが、これらは全て形や教えは違えど、今生きている人が安息、安心、安らぎを得るための場所やシステムだった。時代や人の考え方の変化によって形態は少しずつ変化し、或いはいつかは消失してしまうかもしれないが、それを受け止めようとしたり今の形を守ろうとする動きも全て今生きている人によるものである。川倉地蔵尊と恐山は死を強く意識させられる場所だったが、これも今生きている人が来ることによって生を感じることが出来るということがあるかもしれないと考えた。死後の世界や神の国などの存在が本当にあるのかは定かではないが、これらは全て今生きている人が生きていく間に安らぎを得るために必要なものであるとスタディツアーの中で考えた。

今回は見学時間が短く十分に満足がいくまで見学しつくすことは叶わなかったが、先生の講義を聴きながら見学することは趣味で見に行くよりもより深く様々な視点から考えることが出来た。また今回スタディツアーに参加する機会があったことに感謝するとともに様々なことを教えてくださった先生方にも心から感謝する。

0. 初めに

2019年7月20日、21日「東北の霊場と宗教建築」のスタディツアーに参加させていただいた。移動時間中にも深い話を聞かせていただき、とても充実した二日間であった。専門家の方々のお話を聞きながら、このような、宗教建築を見る事ができたのはとても貴重な経験であり。個人で見に行っただけでは得られない、深い所まで触れる事が出来たように思えた。

1. 川倉賽の河原地蔵尊

サイノカワラは青森各地にあり、地蔵が祀られている。この川倉賽の河原地蔵尊にもたくさん、地蔵が祀られていた。地蔵尊の中には着物を着せられた地蔵が大量においてあり、不気味さを醸し出していた。また、この地域には、若くして亡くなった死者が成人になったあたりで、その結婚相手代わりに人形を奉納する冥婚という風習があり、この川倉賽の河原地蔵尊にも多数の人形が奉納されていた。



多数の地蔵



冥婚の人形

死者のその後の世界を考えると、仏教における世界観とはまた少し異なっているように思え、民間信仰の面白さを感じさせられた。しかし、この死者に対する考え方からは不気味さを感じさせられた。問題なのは、何が不気味さを生み出しているかという点である。自分自身は無宗教であると思っていたが、目の前の人形が死者で結婚をしているという状態を考える事から、霊がそこにいると感じさせられ、奇妙さを感じさせられたのかもしれない。

い。自分自身があまり宗教的なものを信じていなくても、無意識のうちに何らかの宗教観が形作られていたのかもしれないという自己理解にも繋がった。

2. 恐山

2.1 イタコの口寄せ

イタコとは、日本のシャーマンで、死者の霊を、口寄せを用いて呼び出す事を行っていた。今回のスタディツアーは恐山の大神祭の日であり、大神祭の日にはイタコの小屋が現れ、口寄せをお願いする事ができる。今回は（7月21日）には二人のイタコにより口寄せが行われていた。



イタコの口寄せ

今回、実際にイタコに口寄せをお願いしたので、その内容について報告する。

自分が小さい頃亡くなった祖父の口寄せを行った。まず、はじめにイタコの前に座り、呼び出したい人とその人の命日を伝える。祖父の命日を伝えると、歌が始まった。その歌の歌詞は、わかる部分も多く7月11日（祖父の命日）に亡くなった人を呼んでいるというような文言も含まれていた。その後、歌が終わると、イタコから、質問がなされる。どうして亡くなったかという事を聞かれ、ガンであるという事を伝えた。この時、自分はイタコと話しているのかおろしてきた霊と話しているのかよくわからないあいまいな状態が作りだされていた。その後、何か聞きたいことがあるか？という質問がなされ、自分は、祖母が寂しそうにはしているが皆元気でやっているという旨を伝えた。すると、両親を大切にしようがよいというアドバイスや、年末気を付けたほうが良いというアドバイスをされ終了した。祖父は小さい頃亡くなり、そこまで記憶がある訳ではなかったため、祖父しか知らないはずの

情報をイタコが取り出すといった超自然的な現象などは無かった。しかし、自分は、神や霊の存在は信じていなのにかかわらず、目の前にいるのが祖父であったとしてもおかしくはないという気持ちにはさせられた。仮に、本当に霊をおろしていたとしてもおかしく無い雰囲気、その空間に内包されているように感じた。この、イタコの口寄せにおいて、「何か他に聞きたい事があるか」と再び質問する事は前の人番でも行われており、イタコの口寄せにおいて、重要な役割を果たしているように思えた。ここで聞き返す事をする事で、口寄せを頼む側が何をしてもらいたいかを明らかにし、それに応じた適切な応答ができるように作られているのではないだろうか。また、前の人達の口寄せを見ていると、同じような流れが確立しているように見え、このスタイルは今回お願いしたイタコ固有の方法論であるのか、それともイタコ達によって異なるのか、イタコ達同士の情報共有がどのようになっているのかも気になった。

また、一つ前の番では、自分の子供が亡くなった方が、口寄せを行っていたのだが、その際何処で何を買って供養した方が良いという具体的な手法まで言及して指摘していた。さらに、自分が口寄せをお願いする際、イタコの服装を近くで見る事が出来たのだが、般若心経が書かれた布を身に着けており、また数珠を持ちカタカタと鳴らしていた。イタコと仏教との間の繋がりを見る事が出来どのような世界観でイタコが存在しているのか疑問に思った。

2.2 民間信仰領域



石の山と風車



湖

まず、この恐山の領域の荘厳さに、驚かされた。今回はあまり煙が出ていなかったものの、硫黄の跡がある地形に小さな石の山がつらなりそこには風車が刺さっている、そこを抜けると現れる非常に透明で美しい湖が現れる。この環境は、ここに何かがあるような荘厳さを感じさせられた。一つこの場所で興味深かったのは、割りばしに名前を書きそれを湖の方に向けて飾るという民間信仰である。この信仰は、近年できたものであり、この場所で誰かが行いその真似をして広がっていったという話であった。これは、民間信仰ゆえの何でもありな特徴であるが、これは「模倣」と、「変異」のアルゴリズムであり、「進化」のメカニズムと似ている様に思えた。一般的な、宗教には教義が存在し、違う方向へ進むのを「拘束」するような、変化を妨げる力が働くが、民間信仰には確定した教義が無く進化の方向性は拘束されない。このような、自由に変容していく所に、民間信仰の面白さを感じさせられた。また、同時に、何故このような自由な民間信仰と、教義が存在する宗教が同時に存在する事ができているのか疑問に思った。



五智如来（六地藏）

そのような、民間信仰と仏教とのせめぎあい、非常に面白かったのがこの五智如来である。これは、五智如来として作られたものであったが、一般の人達が（勝手に）地藏を一つ追加し、六地藏と呼ばれているとの事であった。近年、五智如来という看板が寺により、立てられ、現在の様になっている。このように、自由な民間信仰を寺側が正すという力が働いており、せめぎあう構造が出来ていると言え、バランスがどのように取られているのか知りたいと感じた。

3. 松緑神道 大和山

山の中の心地良い自然の中に、松緑神道大和山本部があった。松緑神道大和山は 100 年以上の歴史がある神道系の新興宗教である。中に入り、お祓いを受けた後、施設の説明を受けた。



大和山の講堂

特に、興味深かったのは、教祖の小屋や城が祀られている事であった。城や小屋が祀られているのを見たのは初めてだった。



教祖天小屋



城

また、全体として特に違和感のようなものを感じず、自然と全体を感じられたのが自分にとっては驚きであった。例えば、タイやラオスの寺院であったり、日本のモスクを見た時には何かしら自分の中で異質なものと触れ合っているような感覚を感じたのだが、大和山ではそれは無かった。見るものも、木や城や小屋や石といった日本人には馴染みがあるものであったから異質な印象を感じる事が無く受け入れる事ができたのかもしれない。高齢化問題が加速しているという話もあったが、本当に、日本全体どこでも起こっており、重大な問題であるという事を実感させられた。そのような点からも、何かこの大和山の馴染み深さを感じた。

4. 終わりに

本当に有意義な経験でした。豪華な専門家の方々から色々な話を聞いて非常に楽しかったです。参加したメンバーも個性豊かな方が多くちょっとした話からも普段に無いような面白さを感じました。このような素晴らしいスタディツアーを開いて頂き、心からお礼申し上げます。

恐山スタディツアーに参加して

東京大学文学部人文学科日本史学専修課程4年 河野純平

普段宗教学とはあまり関係のない研究を行っているが、今回ご縁があり本スタディツアーに参加することになった。短い日程ではあったが、見るもの全てが新鮮なもので有意義な時間を得ることができた。以下、門外漢の書くもので拙いものになってしまうが、本ツアーの報告を述べたいと思う。

最初に訪れた川倉地蔵は、個人的には本ツアーの中で最も衝撃を感じたものであった。私は過去に慰霊を目的とした宗教施設等には幾つか足を運んだことがあったが、そこに並んでいる石仏や石塔、あるいは死者の名前を刻み込んだ碑文は、いずれも死者一人一人の生前の有り様といったものを捨象したものであった。生前の世界と死後の世界は切り離されているのである。それに対し川倉地蔵は、死者の写真や日常品など、生前の面影を残すものが多く供えられている。また、死者の「成長」に合わせて花嫁/花婿人形を供える風習も残る。ここでは死者は生前と変わらずに扱われている。人が亡くなった時の表現として、「時間が止まった」というものをよく目にするが、ここでは死者の時間は止まらず、動き続けていると感じた。死者一人一人の姿を生々しく留めるこの場所は、今まで見てきたいかなる慰霊施設や墓地、葬式会場よりも、強く人間の「死」を感じる空間であった。墓地を指す言葉の一つに「ネクロポリス」と言うものがあるが、これは墓地よりも死者が未だに「生きている」川倉地蔵にこそふさわしい言葉かもしれない。

あらゆる死者が集まる地と言われる恐山は、より濃厚な死の匂いを感じ取れる場所であるかと思っていたが、実際に訪れてみるとそうでもないようであった。死者を迎えるための民間信仰の幾つかは残っていたが、供物が川倉地蔵のそれに比べると画一的で、死者一人一人の個性（適当な表現が思いつかなかった）が表れていない、何者であるか区別しようがないものになっていた。どうやら少し前までは川倉地蔵のように多様な供物があり、全体の数も多かったが、寺院当局の意向もあり、現在のような姿になっていったようだ。数年も経てばこれまでのような民間信仰的要素はほとんど見られなくなってしまうだろう。民間信仰と宗教団体主導の信仰の境目を見たような気がした。

恐山といえばイタコの口寄せが知られる。死者の声を生者に伝えるイタコの存在は、弔いが本質的には生者のために行われているということ象徴するものであるように感じられる。近年はこのイタコも消滅の淵に立たされているようであった。この年恐山大祭に訪れたイタコは2人、去年から1人少なくなってしまったようだ。数年以内に（狭義の）イタコの存在は歴史上のものになってしまうだろう。目の不自由な方々への社会福祉が充実する中、過酷な修行を伴うイタコになる人がいなくなってしまうのは理解できるが、イタコの口寄

せを聞きに来る人々まで大きく減少しているのは意外だった。イタコが消滅する時は、特に話題にもならずひっそりと消滅しそうである。

松緑神道大和山の参拝も興味深いものだった。信仰宗教施設の本山を参拝するのは初めてだったからである。この教団の信者は年々高齢化が進んでいるという。穏便な活動を行う教団であったが、大きな特徴が少ないと信者獲得は難しいのだろうか。

ところでこのツアーの表題は「東北の霊場と宗教建築」というものだったが、建築を空間と置き換えると、実に表題通りのツアーであると感じた。今回巡った3箇所の施設は「霊場」であることはもちろんの事、空間的にも興味深いものであった。民間信仰というところか無秩序なものを連想してしまうが、川倉地蔵も恐山もどの空間でどのような信仰が行われるのか区別がつけられているのは興味深かった。特に恐山は史料からもその様子が伺え、かつ現在まである程度継承されているのはなお興味深かった。大和山も教団本部があるだけでなくその周辺に小規模な宗教都市を築いていた。山中の宗教都市は閉鎖的で自給自足の生活を営むイメージがあったが、ここはそのようなことはないらしい。

拙い文章となってしまったが、最後に、本ツアーを企画してくださった ASNET と東北大学の関係者の皆様に感謝の言葉を申し上げたい。ありがとうございました。

1. はじめに

この「恐山スタディツアー」は、2019年7月20日（土）から21日（日）にかけて、東北大学・東京大学・岩手大学の先生方・学生が青森県の3カ所の信仰の地を巡った「東北宗教ツアー」である。本報告文では、主な訪問地である3つの信仰の地に加え、バス移動や宿泊地で感じたことについても述べる。報告者は建築学を学んでいるため、建築学からの視点を中心に報告する。

2. 川倉賽の河原地蔵尊

青森県津軽地方では、地蔵信仰が盛んで、子供を亡くした親が、民間宗教者や寺僧などの指示で、追慕するように小型の木石の地蔵を造り、寺院やムラの地蔵堂などへ奉納する行動がしばしば見られる。五所川原市にある「川倉賽の河原地蔵尊」もそういった場所の一つで、「賽の河原」と呼ばれる湖畔のそばの本堂には多くの地蔵や遺品が並び（図1）、また隣の人形堂には県内外から奉納された「花嫁人形」が並んでいる（図2）。



図1

この地で最も興味深かったのは、鳥居、お堂、人形堂、舞台、「賽の河原」、裏手の墓地、龍神さまといった、様々な宗派・信仰の宗教空間が寄り添って一体となることで、人を惹きつける1つの場所を作り出していることだ。先生方のお話によると、東北地方では神仏分離が徹底されず、未だ神仏習合の面影を残す社寺が多い。この地もまさに神仏習合的であり、また「神」「仏」のみならず、そこに民俗信仰的な雰囲気も同居しているのだ。



図2

人の生き様は決して白黒つけられるものではない。「死」が濃縮されたような場所だからこそ、白黒つけられないありのままの人間の「生」がにじみ出ているように感じられた。

3. 恐山

恐山とは、青森県下北半島の中央部に位置する活火山で、主に津軽地方の信仰を集める霊場である。津軽地方では、死んだ人の魂は山に帰ると信じられており、ここ恐山では民俗信仰色の強い形で死者供養が行われている。

私たちが訪れたのは、大祭期間中の日曜日の午前中であつた。観光客でごった返しているのかと思いきや、意外にも人はまばらで訪問客の多くはお供え物の花や食べ物を持った人々だった。霊場に入ると、まずむつ市内にある円通寺が管理する曹洞宗の参道に入る。参道右手にはイタコ



図3

の小屋があつたが、2件のみで口寄せのための行列も短く、恐山の衰退を印象付けた（図3）。参道は石敷きで、入り口からまっすぐ奥に伸びて突き当たりにお堂がある（図4）。多くの寺院では

突き当たりに本堂があるが、ここでは突き当たりに地蔵堂があり、本堂は参道途中左手にあった。これは、地蔵信仰が盛んな地域であること、そして曹洞宗の管理下にあるとはいえ仏教色が薄いことを示すといえよう。参道に沿って旗を立てられており、この旗が風にたなびいて揺れることで鳴る音が印象的だった。参道の両側には温泉小屋が建てられており、霊場以前に湯治場として有名だった歴史が感じられた。

地蔵堂に向かって左手には、民俗信仰色の強い霊場が広がる。ここでは、まず岩肌がむき出しの地面から蒸気が吹き出す「地獄めぐり」ゾーンを進み、その後宇曽利湖の砂浜である「極楽浜」にたどり着く。「地獄めぐり」ゾーンでは石積みやお供え物など、直接的に死者供養が行われており、それが独特の景観を生み出していた（図5）。

「極楽浜」には、かつては訪問客によって建てられた供養塔があったたようだが、近年の曹洞宗側の規制強化によりそれらは撤去され、現在は白い砂浜が広がっていた（図6）。どちらのゾーンでも、あちらこちらに、お供え物や石積みに向かって手を合わせる訪問客や、座り込んで死者とともにご飯を食べたり談笑する訪問客がみられた（図7）。

「極楽浜」を過ぎると、しばらく岩肌を歩いて曹洞宗参道に戻る。曹洞宗境内→地獄めぐり→極楽浜→曹洞宗境内という、一連の参詣順路が霊場体験を作り出していた。霊場体験を通して感じたことは、その参詣順路が歩いているだけで楽しい遊楽施設であると同時に、死者と向き合う姿勢を作り出す装置であることだった。恐山は死者供養の性格だけでなく、古くから観光地として人気だった。それは、次々に目前に現れる異なる自然環境が人々の目を楽しませたからだろう。そして死者を供養する者は、順路を歩むというプロセスを経ることで、非日常に入り込み、より死者を憶うことができるのではないだろうか。これら2つの性格をうまく融合させた空間を作り出したことで、恐山は江戸時代以降多くの人々を惹きつけたのだろう。

4. 松緑神道大和山

大正7年から教祖 田澤清四郎（法名：大和松風）が修行を積み、昭和5年に結成された松緑神道大和山は、どの宗派にも寄らない独自の発祥と発展を遂げた神道系新宗教である。その自給自足の共同体は、青森市の小湊駅から車で20分ほどの山裾に広がっており、広大な敷地の中に、神集閣（大神殿）（図8）をはじめとする礼拝施設や納骨堂、ご神木、付属高校、田畑などが位置している。



図4



図5



図6



図7



図8

ここを訪れて教団の方に様々な説明をしていただいて最も興味深かったのが、教祖と教団の建築への強い意識である。教団の原点とも呼べるような場所にあったのが、「教祖天小屋」という教祖が自ら建設した修行小屋（図9）と、「石庭」（図10）という教祖によって作られた教団敷地の未来予想図だ。五十嵐太郎『新宗教と巨大建築』にあるように、一般的に若い教団において教祖が生きているような早い段階から建築が発達するのはまれである。しかしこの松緑神道大和山では、初期の建築が保護され、教祖自らによって境内地の計画が作られるなど、建築が早くから信者の信仰の拠り所となるべく建設され、活用されているのだ。教団の方に質問したところ、建築の重視は必ずしも自覚的ではないようだったが、それも含め、建築を専門とする人間としては、建築の専門家ではない人々（建築を特別重要視していない人々）が建築を活用している様子を見ることで建築の魅力や影響力を再確認することができて非常に嬉しかった。



図9



図10

5. その他

今回のスタディーツアーでは、普段接点を持たない分野の同年代の学生や、先生と近い距離で話をする事が出来て非常に有意義であった。仙台から青森までのバス移動は非常に長かったが、その分異分野の話を聞くことが出来て面白かった。ホテルでの懇親会でも、個人的な研究テーマについて他大学の他分野の先生に相談するという非常に貴重で意義深い機会を持つことができた。

また、むつ市での宿泊では、ホテル近くの神社で行われていたお祭りに短時間ではあるが参加することが出来た。

東京のような都市部の祭りとは異なり、老若男女が同じように祭りを楽しみ、また祭りという機会に集まることで交流を深めている様子を見ることができた（図11）。本殿での神楽や境内での盆踊り、出店など様々な活動が同時進行で展開しており、生き生きとした様子にとってもわくわくした。境内だけでなく、参道上の家々の玄関先の提灯も見ることができ、氏子組織がまだ機能していることが感じられた。



図11

ASNET スタディツアー「東北の霊場と宗教建築 川倉地蔵と恐山」報告文

東京大学死生学・応用倫理センター研究員

朴 炳道

2019. 7. 31.

1. はじめに

今回のスタディツアーは、まだ訪問したことのない「東北」へ、それも「東北宗教」に関する場所を訪れるということで、少しは興奮しながら参加した。日本宗教を専門としているものとして、6年間の留学期間中、東北地域を訪問したことがないということに、恥ずかしさすら感じているところであった。柳田國男をはじめ、数多くの宗教研究者が東北地域の宗教文化を中心に、日本宗教を論じてきており、私もその文献の中では東北について読んできているが、実際の「東北の宗教」を経験することは、今回が初めてであった。一泊二日、それも仙台から青森県まで行ってから三つの場所を訪問する、かなり限られた時間でのスタディツアーであったが、東北の宗教文化を体験することは十分にできた貴重な機会であった。

2. 川倉地蔵尊

初日の7月20日に訪問した最初の場所は「川倉地蔵尊」という東北の民俗的な地蔵信仰を見ることができるところであった。日本の地蔵像やその背景にある地蔵信仰は、外国観光客だけでなく、外国人研究者の目を引く興味深いテーマである。私も近世日本の災害死者の慰霊における地蔵信仰について研究しており、今回の川倉地蔵尊の訪問を通して、死者に向き合う東北の人々の姿やその背景にある地蔵信仰も体験できたと思われる。

ここは、「津軽霊場 川倉賽の河原地蔵尊」とパンフレットには書いてあり、教団化していない民俗信仰の場所とみえる。多くの地蔵像が堂の中や外に並べられており、その周辺には地蔵に供養する、あるいは地蔵を通して死者に供養する様々なものが供えられている。履物や服、カバン、食べ物や酒もみえる。



<図1. 地蔵堂の中>



<図2. 地蔵堂の外>

この多くの地蔵尊には、生前の名前と、戒名、命日も書いてあり、地蔵は死者自体を象徴するものである一方、地蔵が地獄にいる死者を救済するという一方で、その死者の救世主を象徴するものにもなると思われる。つまり、川倉地蔵尊というところは、死者の冥福を祈る場所であり、とくに地蔵像とその背景にある地蔵信仰を媒介に、「二重の供養」を行うところとして考えられる。死後の死者への必要な物の供養を通して、彼らが死後にも安穩に過ごせることを祈る一方、死者の救済ができる地蔵への供養を通して、死者の地獄からの救済や後生善処を祈ることもある。

地蔵堂より、さらに興味深いところは、人形堂であった。この人形堂には、結婚せずに若い時期に死んだ死者を、人形と縁を結び結婚させるところである。中国や韓国には「靈魂結婚」というものがあり、生前に縁のない二人の死者を死後に縁を結ばせる儀式が民間には伝わっているが、現代日本では、「花嫁人形」・「花婿人形」という人形と結婚をさせる形でみられるのである。東北大の先生の説明では、死者が死んだ後も成長していくという認識から、結婚の時期になると人形と結婚させる風習ができたという。主に親による子供供養の形になると思われるが、早い時期に子供を失った親がその死後の子供をそのまま忘れることができず、彼らと共に生き、また結婚の時期になると子供のために結婚までさせようとする、その切ない心が伝わってきた。この川倉地蔵尊全体は、死者を記憶し共に生きていこうとする生者側の強い、また切ない意志に覆われていると感じられた。

3. 恐山

二日目の朝からは本州最北端にある恐山を訪問した。恐山は、今回スタディツアーのメイン訪問先であるが、私は今回の参加で初めて知り、様々な意味で衝撃が走ったところであった。日本の山岳信仰として有名な山は、富士山をはじめ、比叡山、高野山など数多くあり、私も力が及ぶ限り行ってみようとしているが、恐山は他の山岳信仰の山とは、質的に異なる場所であった。この山は、位置的に本州最北端にあることや、山頂まで入ることがかなり難しいこと、山頂には火山活動が今も続いており、硫黄の匂いが強く、煙もみられるところということ、また山頂に「宇曾利湖」という湖もあり、「この世」から「あの世」に行くという意味で捉えられている。すなわち、人が死ぬと向かう山であり、この山に登るとともに死者とともに登ることもある。バスから降りてみた恐山は、本当にこの世ではない、今まで見たことのない風景であり、驚きが止まらなかった。

恐山について書いた論文では、恐山の空間構造は二分化されており、寺院で管理するところと、民間の活動が行われるところがあるという。今回みた恐山は、確かに曹洞宗円通寺の末寺の恐山菩提寺が管轄する寺院の領域とその左側に広がる空間がはっきり区分されているようにみえた。ただ、全体的には民間での死者供養の場所が先立ち、後ほどに仏教の寺院が入り、分割化されたことも感じられた。そのため、恐山は特定の宗派の寺院を中心に捉えるより、「霊場恐山」そのものとして捉えることが良いかと思われた。前日訪問した「川倉地蔵尊」と同じく、「霊場恐山」も「地蔵」を中心に死者供養が行われている点では、寺院と民間の差は存在しない。寺院の左側に広がる火山地域には、様々な形の地蔵像と積み石、風車とともにその前には食べ物・飲み物・履

物・衣服などの供え物が置かれていた。恐山を参拝する人々は、自分の家族や先祖の死者を思いつつ、火山地域に形成された地蔵像などをめぐる「地獄めぐり」を行い、死者供養をする形になっている。とくに「宇曽利湖」を向けて供えられた卒塔婆と花などは、他のところではみることができない風景であった。



<図3. 地蔵と積み石>



<図4. 宇曽利湖の供え花>

恐山の訪問でもうひとつ忘れないことは、イタコの口寄せを体験することができたということである。イタコは沖縄のユタとともに、日本の代表的なシャーマンとして知られており、私も本などでは読んだことがあるが、実際に口寄せを聞くことは初めてであった。イタコの存在すらほとんどなくなっている時代にイタコとイタコの口寄せを願う人々を实际みることができるとは思っていなかったため、大変興奮しながらイタコと依頼者の間でのやりとりを傾聴した。歌から始まり、依頼者の死者を探る過程、そして死者がイタコに降りて語る姿とその内容を見て、実際東北のシャーマンを通して行われる死者と生者の交流を経験している気がした。死者を忘れられないという生者の強い念とともに、イタコの口寄せを通して慰められる生者側をみていると、イタコこそ、グリーフケアを行っている医者のような存在ではないかと思われた。

4. 松緑神道大和山本部

最後に訪問先は、日本新宗教教団のひとつである「松緑神道大和山」の本部であった。宗教学研究室の団体旅行でも毎年新宗教教団を訪問しているが、東北の新宗教教団を訪れることは今回が私にとって初めてである。とくに松緑神道大和山の第2代教主である大和小松風が東大宗教学研究室出身であることを知り、彼の宗教学知識は教団の発展にどのような影響を与えたのかという点で気になっていたところでもあった。

山の中に籠っているようなところに位置する本部は、教祖大和松風が神秘体験をし、小屋を建てた場所であり、礼拝が行われる「天峰閣」とともに、大きな「神集閣」というビル、また「松風塾高等学校」もある。我々はまず、「天峰閣」で神道風の礼拝を行った。そして、「天峰閣」の前にある「ご神木」と「七つの石像」、「石庭」に関する説明を聞いた。とくに興味深かったのが、「七つの石像」の説明であり、自然石の形であるが、教祖はこの石像を、各宗教を教祖として認識する経験をしたという。松緑神道大和山本部が特定の宗教の教派というより、世界の様々な宗

教の教えの影響を受けながら、人類の救済を共通使命にしていることを象徴的に表すものとして考えられた。

これほど広い土地に大きなビルを構えているが、現在や未来の信徒の募集や教団の運営がどのようになっているのか気になった。これは、新宗教教団だけでなく、仏教・キリスト教など既存宗教も抱えている大きな課題である。質疑応答時間に出た関連質問に対し、松緑神道大和山も非常に悩んでいる問題であることを率直に話してくれた。信徒の高齢化とともに、若い世代がいないということは、現在のすべての教団の悩みであることを再び確認した。



<図 5. 七つの石像>



<図 6. 石庭>

5. 終わりに

一泊二日という短い期間であったが、東北の宗教霊場を訪れて経験することは十分できたと思われる。とくに「川倉地藏尊」と「恐山」の訪問は、私の研究においても、東北の死者供養や民間地藏信仰の姿をみることができた貴重な機会であった。今回のツアーをきっかけに東北の様々なことを体験し、研究していこうと考えている。

ASNET 主催スタディツアー

「東北の霊場と宗教建築 川倉地蔵と恐山」報告書

東京大学 総合文化研究科 文化人類学コース

修士2年 廣瀬 華子

1.はじめに

本スタディツアーは、東北地方(青森県)有数の霊場や宗教建築を訪れ、現代における人びとの慣行を観察し、宗教実践への理解と考察を深めるという目的のもとに行われた。

私自身の研究テーマは、現代インドの家族間の関係についてであり、個人的には「生者と亡者へと分かたれた家族がいかにつながり続けようとしているか」に関心があった。また、私は来学期よりスウェーデンへの留学を予定しているが、そもそも自国の宗教というものについて理解が不足していると感じていた。加えて、文化人類学を勉強している身として、先生方がいかにフィールドと付き合っているか学ばせていただきたいと思い、本スタディツアーに参加させていただいた次第である。

2.スタディツアーの概要

【日程】2019年7月20日(土)~21日(日)

7月20日(土)	7月21日(日)
仙台駅集合	ホテル発
↓	↓
岩手山PAで昼食休憩	<u>恐山(2)</u> 見学
↓	↓
<u>川倉地蔵尊(1)</u> 見学 (青森県五所川原市金木町川倉字七夕野 426-1)	<u>松緑神道大和山(3)</u> 見学 (青森県東津軽郡平内町大字外童子滝の沢 12-13)
↓	↓
ホテル着・懇親会 (青森県むつ市本町1-4)	仙台駅解散

【参加者】岩手県立大学・東京大学・東北大学より 教員(引率補助・研究助手込)12名 学生(研究員・履修生込)24名 計36名

3.内容

以下は、3つの霊場・宗教建築について、事前に送っていただいた資料を踏まえ、先生方の講義をもとに、感じたこと・学んだ内容について述べる。

(1)川倉地蔵尊

川倉地蔵尊は、地域の人たちからはこの世とあの世の境界である「賽の河原」と呼ばれている。「幼くして亡くなった子どもたちは極楽へも地獄へも行けず、賽の河原で過ごす」という仏教の教えに基づいて、亡くなった子どもたちを想って親族らがさまざまなものを供えている。

ここで特徴的なのは亡者が成長する感覚が現れていることであるという。例えば、学校に入る年齢になるとランドセル、結婚する年齢になると花嫁人形・花婿人形を奉納する。川倉地蔵尊で最も顕著なのは花嫁・花婿人形で、現在奉納する人数は少なくなってきているとはいえ、今でも数百の人形が並んでいる。令和元年のものもいくつか見られ、生きた風習であることが感じられた。

これと似た風習に山形県のムカサリ絵馬があり、ムカサリ絵馬や花嫁・花婿人形は、冥婚の儀礼によって死者を一人前とさせ、生を全うし得なかった荒魂にとどまる怨霊を恩寵的で慈しみをもった祖霊である和魂に移行させる行為で、他のアジア地域やアフリカで見られる冥婚とは社会的地位や財産の譲渡を伴わない点で相違する。

人形の種類は日本人形が最も多かったが、フランス人形のようなものやリカちゃん、フィギュアなど個性豊かであった。人形には大人を象徴する酒・タバコ・車(ミニカー)が共に備えられていることが多かった。

川倉地蔵尊は寺のように見えるが、地域の住民が主体となって管理している民間信仰の聖地であり、この点は円通寺が管理する恐山とは大きく異なる点である。



図 1:川倉地蔵尊に奉納された人形の一部

(2) 恐山

恐山は天台宗の円仁が開山し、現在は曹洞宗の円通寺が管理している。曹洞宗というと修行のイメージが強いが、一方で民衆のために葬祭・祈祷をすすめてきた教団でもあるという。そのため、恐山は「人は亡くなったら山へ行く」などの民間信仰を体現する場であると同時に曹洞宗の寺としての側面も強い。

恐山へは夏の大祭・夏参り・秋参りの年3回、北東北を中心に全国から参拝者が多く集まる時期があり、今回の訪問は夏の大祭の時期であった。これらの時期にはイタコが来るのだが、イタコの数は減り続けており、今年の2名は先生方が訪れた中では最少の人数だという。我々が観察させていただいたイタコは、亡者の命日・依頼者との関係性・何か言いたいこと、を伝えることで、霊をおろすというものであった。生者である依頼者が「私たちのことは気にしないで」というようなことを伝えたいと言うと、「そう言うわけにはいかない、気にかけている」と応えていたのが印象的であった。生者にとっては、成仏してほしいと思うと同時に、どこかで繋がりつづける感覚というのも重要なかもしれない。また、息子を水の事故で亡くした父に対し「寒がっているから服を」と伝えていたが、亡者のために何かしないではいられない遺された者の気持ちにとって、イタコという媒介者は非常に重要な存在だと感じた。



図 2.3：宗教実践は現在でも刻々と変化が続いている。左は 5 年前に私が恐山を訪れた時の写真、右が今回の訪問で撮った写真。石の量が少し増えており、前回の訪問では見られなかった風車が追加されている。

(3) 松緑神道大和山

大和山では松緑神道の歴史について解説をいただきながらいくつかの施設を見学させていただいた。この地では、山を切り開き 150 人ほどの信者たちが共同で自給自足を行なって暮らしている。全寮制の高校が併設されているが、学生は信者以外が多いということであった。信者は全国にいるが青森・北海道に特に多い。

私たちはまず 1955 年に建てられた天峰閣を見学した。天峰閣では、聖歌⇒祝詞⇒お祓いの順に儀式をしていただき、教祖が吹いていたものと同じ石笛も聞かせていただいた。

大和山は、教祖が描いた理想郷のイメージをビジュアル化した建造物が点在していることが特徴である。とりわけ特徴的なのが将来の大和山の設計図である石庭で、鉄道以外はほ

ば実現しているという事実が印象的であった。

最後に神集閣で私たちの質問に丁寧に答えていただいた。私もいくつか質問をさせていただいたが、特に印象に残っているものは、「石像は恐山に見られる石積みと何か関連があるのか」という質問に対する「既存の宗教とは全く関係がなく、教祖が修行の中で石から感じたものをああいう形にした」との答えであった。大和山は慰霊関連の行事を非常に熱心に行なっており、宗教にかかわらず、霊を想う人のところが石像や石積みのような形に現れるのかなと感じた。

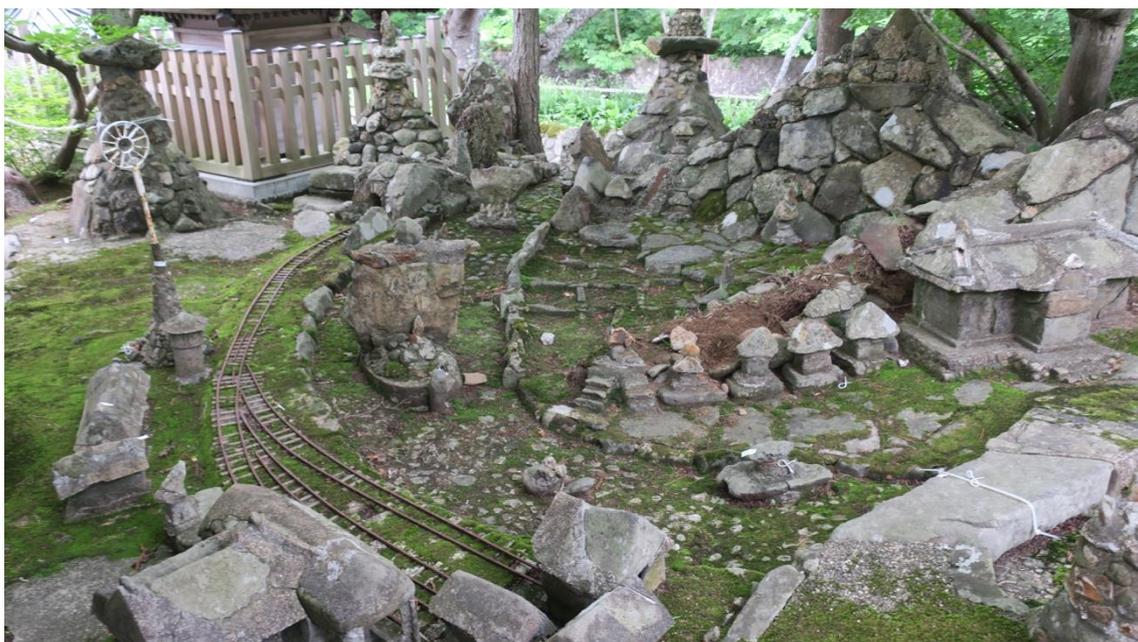


図 4:教祖が描いた理想像のイメージ。

4.おわりに

スタディツアーを通して、亡者というものを人々が思い浮かべるさまざまなあり方を見ることができた。人は(時に論理的には矛盾を抱えながらも)アクセス可能なものに少しでも手足を伸ばすことで、多様な場所に亡者を見出しながら、亡者との対話の時を過ごしているのだと感じた。

今回の報告書では紙面の都合上省略したが、1日目の晩、たまたま地域の人々が参加する盆踊りも見学することができた。盆踊りはそもそも亡者を供養するためのものである。私たちは暮らしの中で実に様々な形で亡者とつながろうとしつつ生きているのである。

2日という短い期間ではあったが、懇親会を中心として学年も大学も専門も異なる人たちと交流することができた。バスの運転手さん、見学させてくださった施設の方々、巡礼中の方々、お世話になった先生方に、改めてお礼申し上げたい。ありがとうございました。